

二〇二二年一月七日

懐に子犬抱へて御慶述ぶ  
コンビニの七草パック山と積む  
煎り酒の匂ふ厨や雪しづり  
二種足らぬ七草なれどお祝いす  
七種や故郷に残す母のこと  
どんと焼きウイズコロナの文字も燃ゆ  
和太鼓のドンと響きて寒稽古  
箸置きを二つ並べて七日粥

二〇二二年一月六日

恵方へと糸弛ませるいかのぼり  
川の字に孫を挟みて寝正月  
小さき手より薄氷を譲らるる  
夕空に小寒の月研ぎ澄ます  
赤き掌で湯気の白よりちぎり餅  
大白鳥水面の朝日啄みぬ  
吾ひとり祈るチャペルに淑氣満つ  
ドライバー募集と札や初荷行く  
冬木立空つぽの巣が二つ三つ  
鐘を撞く梢の冬芽震はせて  
初雪の地につくまでに消へにけり

二〇二二年一月五日

獅子舞の大き口から眼鏡顔  
面とれば湯気立つ剣士初稽古  
乗初は一山越ゆる郷帰り  
孫ら来て変顔ごっこ初笑  
重ね着や色のことなど言ふてをれず  
除夜の鐘燭ふるはせて撞きにけり

二〇二二年一月四日

独楽の色同心円に溶け込めり  
突と湯気吹きてケトルの叫びだす

ひのと  
もとこ  
むべ  
宏虎  
ひのと  
明日香  
せつ子  
豊実

たか子  
素秀  
ひのと  
なつき  
豊実  
ひのと  
せつ子  
うつぎ  
あひる  
満天

素秀  
凡士  
素秀  
せつ子  
たか子  
はく子

豊実  
あひる

手に破魔矢帰宅の夫の機嫌よし  
次々の御慶に応ふ神馬かな  
外つ国の嫁の手慣れの雑煮かな  
巫女の鈴頭に戴きて初詣  
畝幅を整へ直し寒に入る

二〇二二年一月三日

みな去にて珈琲旨き三日かな  
風花の湯気に玉砕露天風呂  
初夢に宇宙旅行の吾のゐて  
笹鳴きの参道抜けて神社へと  
子ら去りてやつと私のお正月

二〇二二年一月二日

大人びし孫と手つなぎ初詣  
夢かしら子供たちからお年玉  
賜りし長寿に感謝初日の出  
皿盛りの仕上げに添へる実千両  
初詣で迷子がかりは婦警さん  
一の字に銀翼よぎる初御空  
雑煮 椀代々といふ黒漆

二〇二二年一月一日

明星を残して峽の初明り  
古都の旅母と初乗り人力車  
ずわい蟹バイト仕込みの子の捌き  
黒潮の岬に初松籟を聞く  
金箔の黒豆摘む祝い箸  
うたた寝を起こし起こされ去年今年  
恭しく孫にいたただくお年玉

みきえ  
うつき  
凡士  
うつき  
千鶴

もとこ  
宏虎  
あひる  
こすもす  
明日香

たか子  
明日香  
宏虎  
あひる  
智恵子  
みきえ  
千鶴

素秀  
智恵子  
せいじ  
素秀  
豊実  
なつき  
ぽんこ

毎日句会みのる選・二〇二二年一月一日